

## 「ひかる・かがやく」

岩崎正枝

### 1. はじめに

「ひかる」と「かがやく」は、類似した場面で使われることが多いが、たとえば、「水っぱなが鼻の下に光っている。」(『観小僧次郎吉』芥川龍之介)では、「ひかる」を「かがやく」と言いかえられるだろうか。たとえばたとえても、その文章から受ける印象はかなり変わらぬと思う。ここでは、「ひかる」と「かがやく」の用法の違いを明らかにすることを目標に考察を試みることにする。

「ひかる・かがやく」は、『分類語彙表』では、「自然現象 2.501 光」に分類されている。この分類の中には、他に「きらめく」、「ひらめく」という語も含まれている。また、これらの語は古語の中でも四語に分かれている。従って、「ひかる・かがやく」とともに、その比較として、「きらめく」、「ひらめく」にも目を向けることにする。

### 2. 「ひかる・かがやく」の主体

#### 2.1. 発光体

- (1) 太陽が ひかる。
- (2) 太陽が かがやく。
- (3) 日の光が明るく ひかる。
- (4) 日の光が明るく かがやく。
- (5) ネオンが ひかる。
- (6) ネオンが かがやく。

「ひかる・かがやく」の主体には、自ら光を発している発光体が考えられる。(1),(2)は自然物における発光体であり、月・星・雷なども同様に考える。(5),(6)は人工に作られた発光体で、こ

の場合も、他に、電燈・車のライト・カメラのフラッシュなどがある。また、(3),(4)のように発光体という光源から出される光のそのものも主体となると考えてよい。

## 2.2. 反射体

(1) 海がキラキラと日に ひかる。

(2) 海がキラキラと日に かがやく。

(3) 汗が ひかる。

(4) 汗が かがやく。

「ひかる・かがやく」の主体として、発光体からの光を反射しているものも考えることができる。(1),(2)の場合は、「日に」ということから、太陽の光を反射していることが分かるし、(3),(4)では、外でスポーツなどをしている場合とみれば、太陽の光を反射しているのであろうし、室内での労働とみれば、その照明器具の光を反射しているとみられる。しかし、明確に反射と意識されないことが多い。また、沢のような場合も考えられる。

(5) 東の空が ひかる。

(6) 東の空が かがやく。

(7) 窓が ひかる。

(8) 窓が かがやく。

(5),(6)は多少意味することが異なり、(5)は、爆弾・稲妻などの光、(6)では、それらも含め白々と広く太陽の光などが空という空間を照らしているものと思う。この場合も光の反射のひとつ、と考えられるであろう。(7),(8)においても同様なことが言えようである。

## 3. 「ひかる・かがやく」の用法と主体の性質

### 3.1. 光の程度

「ひかる・かがやく」の主体が光と密接な関係がある以上、光

の強弱・鋭さなど、光の程度をみていく必要がある。

- (1) 草むらでほたるが ぴかる。
- (2) × 草むらでほたるが かがやく。
- (3) 墓地でひとだまが ぴかった。
- (4) × 墓地でひとだまが かがやいた。

ほたる・ひとだま・ろうそくの火など光の量が少いものの場合、「かがやく」は言えない。このことは、「ぼんやりとひかる」、「にぶくひかる」が言えるのに対し、「かがやく」では不自然であることから言えることである。

- (5) 黄金の山が ぴかる。
- (6) 黄金の山が かがやく。
- (7) 太陽がギラギラ ぴかる。
- (8) 太陽がギラギラ かがやく。

光の量が多い強い光の場合には、「ひかる」も「かがやく」も無理なく使える。『類義語辞典』の「光」の項目に、「かがやく」があるがここでは、「かがやくはやや強いはや光である。宝石のかがやくは宝石のひかりよりも、もっと強いあざやかな感じである。」とある。

また、光の鋭さについては、「ひかる・かがやく」よりも著しい特徴を示すのは、「ひらめく」である。

- (9) 爆弾が破裂して閃光が ひらめく。
- (10) 爆弾が破裂して閃光が ひかる。
- (11) 爆弾が破裂して閃光が かがやく。

どれも言えるわけであるが、最も光の鋭さを感じさせるのは、「ひらめく」である。鋭い光を感じさせるということは、光の量も多いということである。つまり、「ひらめく」は、強く鋭い光という制約があるのではないか。

このように光の程度を考えてみると、「かがやく」は、かなり強い光の場合に使われるのが適当で、「ひかる」は、ごく弱い光から

ごく強い光までかなり広い使用領域を持つことが分かる。「ひかる」は、光を感じさせれば使えるのである。

「ひかる・かがやく」の用法は、光の絶対的な量の関係のみで言えるのではなく、周囲の暗さとの関係もある。

- (12) まっ暗闇の中でろうそくの乏しい光が ひかる。
- (13) まっ暗闇の中でろうそくの乏しい光が かがやく。
- (14) 暗い波間で夜光虫が ひかる。
- (15) 暗い波間で夜光虫が かがやく。

このように、あたりがまっ暗であれば、ろうそくの弱々しい光でも夜光虫のような小さな光でも、周囲から際立って見える時は、「かがやく」でも不自然にはならない。絶対的な光の量は少なくとも周囲の状態によっては明るい光となりうる。光の量・光の鋭さなどによる用法は、周囲の状態との相対的な関係を条件とする。

### 3.2. 光の種類

- (1) 卓のライトが ひかる。
- (2) 卓のライトが かがやく。

どちらも言えるわけであるが、「ひかる」の方が、一点の光、あるいは光線のような一直線の光を意識させるのではないか。つまり、「かがやく」よりも「ひかる」の方が、目が主体そのものに向けられるといったことがないか、ということである。

- (3) X 夕焼けが ひかる。
- (4) 夕焼けが かがやく。
- (5) 火花が ひかる。
- (6) 火花が かがやく。

夕焼けのように面的・空間的な場合は、「かがやく」の方が適当と考えられる。火花のように一点の光は、「ひかる」がふさわしくないだろうか。まとめてみると、「ひかる」は、光線・一点の光といったもの、または、その反射に類するもの、「かがやく

くは、広範囲にわたる面的な光、または、その反射に類するものにそれぞれ特徴的に使われる、ということになる。

### 3.3. 明るさ

これは光の量にも関係のあるところだが、「かがやく」の方が主体の周囲まで明るさが及んでいるようである。

暗いところにあかりをともした時、

(1) あかりが ひかる。

(2) あかりが かがやく。

(2)の方が周囲を明るくしているようなニュアンスがないであろうか。このことはすでに述べてきたことと関連がある。「周囲を明るくする」ということは、無論、光の程度に関係するところであり、また、空間を意識するかどうかも念頭に置くべきである。このことから考えると、「かがやく」の方が「明るさ」を意識することが明白になる。「ひかる」が発光体に意味の中心を求めるのに対し、「かがやく」は周囲の明るさに意味の中心を求める傾向があるため、「周囲を明るくする」という感じも強いのである。

### 3.4. 光以外の主体の性質

「ひかる・かがやく」の主体には、光という条件があるが、他の性質はどうであろうか。

(1) 水。ぼんが ひかる。

(2) × 水。ぼんが かがやく。

(3) 洋服がすりきれて ひかる。

(4) × 洋服がすりきれて かがやく。

(5) 金盞が ひかる。

(6) ? 金盞が かがやく。

水、ぼんやすりきれた洋服は強い光を放つわけがないので「かがやく」は使いにくい。しかし、(2)で、水、ぼんを汗や涙に置きかえた時には言える。また、(4)のような言い方を無理に

した場合には、その洋服を着ている人物をからがっ たり皮肉 ったりしたことになる。このように考えてみると、水っ はなや すりきれた洋服というのは、「かがやく」にふさわしくはないものと言えないであろうか。それが、(6)のような言い方を考えるときに微妙に影響するのではないだろうか。

「かがやく」は、辞書の意味でも、「きらきら」、「美しく」、「はなやかに」、「まばゆい」等の意がおのずから備わっているかのように記載されている。「ひかる」が無頓着なのに対して、「かがやく」は美的なところがあふらしい。それは、次のような場合、思い浮かべてせるイメージにも多少影響を与えようである。

(7) 宝石が ひかる。

(8) 宝石が かがやく。

#### 4. 「ひらめく」、「きらめく」との区別

##### 4.1. 「ひらめく」の意味特徴と「ひかる・かがやく」

(1) いなすまが ひらめく。

(2) カメラのフラッシュが ひらめく。

(3) ×星が ひらめく。

(4) ナイフの刃が ひらめく。

「ひらめく」は、瞬間的な光について使われるのであり、「一瞬きらりと光る」『角田同語中辞典』「光る瞬間的に光。て消える」『日本国語大辞典』という意味から切り離せない。いなすまフラッシュは、先づ瞬間的に発するものであり、ナイフの刃も、瞬間的に光を見せた時に「ひらめく」が使われる。他動詞「ひらめかす」には、「刃をひらめかす」という使い方があるが、これも同様である。また、抽象化した意味でも同じように考えられる。

(5) 突然頭の中に思ひ考えが ひらめく。

(6) ? 名案が ひらめき絶けた。

(6)は言えるとしたら、何度も異なる名案が浮かぶことを言うのであろう。

『類義語辞典』には、「ひらめくは、きらめくに対して、光の状態からいうと鋭く強く動く感じで光でいえばいなびかりが典型的で、また、旗がひらめくのように、ひらひら動く、ひるがえることもあらわす」とある。

この瞬間性という意味特徴は、「ひかる・かがやく」においてどうだろう。

- (7) カメラのフラッシュがぱっと ひかる。
- (8) カメラのフラッシュがぱっと かがやく。
- (9) 月が一晩中 ひかる。
- (10) 月が一晩中 かがやく。

「ひかる・かがやく」は、瞬間の光でも継続性のある光でも使えようであるが、どうであろうか。

#### 4.2.「きらめく」の意味特徴と「ひかる・かがやく」

- (1) 朝日が きらめく。
- (2) 星が きらめく。
- (3) ネオンが きらめく。
- (4) ×月が きらめく。
- (5) ×いなすまが きらめく。

「きらめく」は、『類義語辞典』によれば、「ひらめくと比較して、断続的であり、また、きらめきは、星の光のようにきらきらと短い時間の間に強さの変わるもの」ということである。また 辞書の意味では、「きらきら光り輝く」『角川国語中辞典』「きらきらと輝いている、きらは擬態語、めくは接尾語」『日本国語大辞典』となっていて、この「きらきら」という光の変化が条件と思われる。光の強さの変化というところに主眼があるため、反射体によく「きらめく」が使える。

- (6) 海が夏のひを危けて きらめく。

(7) ガラスが光を反射して きらめく。

この「きらめく」の意味特徴を、「ひかる・かがやく」においてみる。

(8) 星が夜空に きらめく。

(9) 星が夜空に ひかる。

(10) 星が夜空に かがやく。

(11) 点々と きらめく ものがあった。

(12) 点々と ひかる ものがあった。

(13) 点々と かがやく ものがあった。

「きらめく」の意味特徴は、「かがやく」にうかがわれるようにう。このことは、「ひかる」が主体からの光の色のもの、つまり、一点の光などに目を向けることと関連がありそうである。

#### 5. 派生的用法

今まで述べてきたことと考え合わせて、「ひかる・かがやく」の派生的な使われ方について考察してみようと思う。

(1) 目が ひかる。(目をひからせる。)

(2) 目が かがやく。(目をかがやかす。)

(3) 彼は憎しみに ひかる 目で私をみつめる。

(4) ×彼は憎しみに かがやく 目で私をみつめる。

(5) ×喜びに顔が ひかる。

(6) 喜びに顔が かがやく。

(2) の場合は、喜び・幸福などが好ましいことがありそれが愛情に出ているさまを言い、それは、(3) の場合も同様である。「かがやく」は、このように人にとって好ましいことからの場合にのみ用いられるのであり、(4) のように、憎しみ・苦痛など不快な場合には用いられない。それに対して、「ひかる」は、そのような場合にも使えることがある。「ひかる」は、光やそれに類するものを感じさせる要素があれば、かなり自由に使える。

ると言っている。①では、「親の目がひかる」といったように、みはる、つまり、あるものに光を注いでいるかのようは使い方であり、③のように、憎しみであるうが目に何らかの光を感じさせれば用いられるようである。一方、「かがやく」は、周辺に明るさを及ぼす場合という制約が加わる。そして、これにアラスして、美的条件もある程度満たさねばならない。

次のようなことも、「かがやく」においては言える。

- (ア) X 早く手が ひかる。
- (イ) 早く手が かがやく。
- (ウ) X 彼の未来は ひかっている。
- (エ) 彼の未来は かがやいている。

⑤、⑥は、これからの明るさにあふれた状態、つまり、明るく照らされた未来を示している。明るさを周囲に及ぼす、という点では次のようなことも考えられる。

- (ウ) 彼女は かがやく ばかりに美しい。

また、次のような時は、「ひかる」を使う。

- (ア) 彼の活躍が ひかる。
- (イ) X 彼の活躍が かがやく。
- (ウ) 才能が ひかる。
- (エ) X 才能が かがやく。

これらの場合、ある一群の中でひとつのものが秀でていることを言う。これが、「ひかる」においてのみ言えるのは、人の目、活躍、才能といった一点に向けられ、その周囲を明るくするというよりむしろ、その発光体に類した自の自体が浮き出ているためであろう。

- (ウ) X 彼の業績は史上にさんせんと ひかっている。
- (イ) 彼の業績は史上にさんせんと かがやいている。
- (ウ) X 競技会で優勝の栄冠に ひかる。
- (イ) 競技会で優勝の栄冠に かがやく。

これは、(12)~(15)の場合と類似しているように見える。しかし、実際は、前述の「かがやく」の意味特徴を考慮すれば、「かがやく」を使うのがむしろ正しいと言える。たとえば、(10)では、業績は光を発するというよりも、歴史上に明るさを及ぼすと考えられそうなのである。

一般に、スポットライトをあてたようにひとつの点に光が注いだような状態で、光が浮かびあがり、視線がそこに集まるといったような時には、「ひかる」が使われ、ほたせが玉、葉しごひなどの要素の加わった光のあふれた周囲を明るくするような状態の時には、「かがやく」が使われるのではないか。

参考文献:

国立国語研究所 『動詞の意味用法の記述的研究』  
1972 香英出版

国立国語研究所 『分類語彙表』 1964 香英出版

徳川宗賢・宮島達夫 『類義語辞典』 1974 東京堂

新村出編 『広辞苑』 1969 岩波書店

時枝誠記・吉田精一編 『角川国語中辞典』

1973、角川書店

『日本国語大辞典』 第六巻・第七巻 1976 小学館

言語経歴: 1956年8月神奈川県厚木市生。現在に至る。